

なお、助動詞「た」の前の語形「たり」も、本書（日本考）に一列みえるが（輸 埋計打利）、これも『日本国考略』（寄語略）の「輸 埋計打計<sup>利</sup>」を書承したものである。

⑨ 文献引用例、方言の語形・使用地域等については、『日本国語大辞典』（「日国大」と略称）・『日本方言大辞典』（「日方大」と略称）に依拠した部分が多い。以下同じである。

⑩ 以下「切音」と略称す。

⑪ 同音異義語「こじける（拗）」があつて、「もつれる、ものがよく煮えない」等の義で用いられる語は今直接関係しない。

⑫ 「今明」門所載の「明日」に照応する音訳漢字は「阿失旦令」で、語義は異なるが、「アシタイ」とよまれる。しかし、これも、不審である。

⑬ 「か」文字、やや判読しがたい。

語がうまれたものと考えられる。「よいのすれ」・「よなかすれ」は時間の推移を示すことばであることは明らかであるから、「すれ」に「過ぎ」の意があるかどうかが鍵になる。「すれ」を「過ぎ」の意に用いた中央語系の事例は管見によればいまだ知らない。ただ、「日方大」は、「すれ(接尾)」の項をあげて、「時刻がすぎる意を表す。過ぎ。熊本県玉名郡」と記している。なお、「すり」については記述するところがない。この点よりすれば、「過ぎ」の意を表す「すれ」の接尾辞的用法が方言(九州方言)の中に現存するのである。この事実をもとにして、十六世紀頃にも「くすれ」に同じ用法(「く過ぎ」)があったとみて、「搖一那四立」・「搖乃隔四立」を「ヨイノスレ」・「ヨナカスレ」とよみ、その語義は「宵の過ぎ」・「夜中過ぎ」であったと考えることができるのである。「くすれ」(「く過ぎ」)に中央語系の事例が全くないのか、また、「くスリ」に同じ意味用法が中央語・地方語ともに全くないのか、更に検討すべきところである。

以上、「搖一那四立」・「搖乃隔四立」は「ヨイノスレ」・「ヨナカスレ」とよみ、その意は、「宵の過ぎ」・「夜中過ぎ」で、両語とも九州方言的性格をもつ語であったと認められる。

〔注〕

① 見出し語の上の・印は筆者が付したもの。(寒温)門は三行にわたり記されている。音訳漢字の日本語は、二行割注の形式をとるものもあるが、ここでは一行に記した。

② 『国朝典故』(卷一〇三)所収本による。

③ 傍線は筆者。以下も同じ。

④ 以下「以路法」と略称す。

⑤ 卷四本文では、「身体」門に、唯一の例「頬 客脉貨」かまほうがある。これは「ホー」という長音の事例か。

⑥ 「人事類」には、第三段の平仮名表記の日本語はすべて欠けている。よって( )内にそれを推定した。なお、音訳漢字の右に( )をして示した文字は、誤字を訂したものである。

⑦ 『叢書集成新編』(第九八冊)所収本による。

⑧ 『日本考』は『日本国考略』の「人事類」に収める語彙項目の順序も踏襲している。ただし、「通用類」所収の「瘦牙十大」を『日本考』では、「人事類」に収めている。

られている。一方、本書巻四本文の事例によれば全五例すべて「リ」の音を表す文字として用いられている。すなわち、

・「酉 獨立」(欠) 「十二支」

・「癸酉 密辞那多獨立」(欠) 「六十甲子」

・「聰明人 立空乃許多 りこんな人」 「人物」

・「圓領 客立勤 かりきん」 「衣服」

・「紗糖 過立索刀 こりさ(た)う」 「飲食」

右の事例に従えば、「四立」を「スリ」とよむことができるが、一方「以路法」の記事によれば「スリ」・「スレ」両様のよみが可能となる。すなわち、「二更」・

「四更」の第二段の音訳漢字の日本語は、それぞれ

二更……ヨイノスリ・ヨイノスレ

四更……ヨナカスリ・ヨナカスレ

の両様のよみが考えられるのである。これ等を第三段の、平仮名表記の日本語と対照すると「よいのすれ」・「よな(か)すれ」とあるので、語形一致の日本語とみれば、第二段を「ヨイノスレ」・「ヨナカスレ」と

よむことになる。しかし、既述のごとく巻四の本文にみえる第二段・第三段の日本語は必ずしも一致しているわけではないからこれだけでは決め手にはならない。「訳注本」によれば、「ヨイノスリ」・「ヨイノスレ」、「ヨナカスリ」・「ヨナカスレ」と各両形をあげ、「宵の過ぎ」の訛か、「夜中過ぎ」の訛か、と注している。「中外本」は「ヨイノスレ」・「ヨナカスレ」と「スレ」形のみを示し、「宵入過」・「夜中過」と注している。「訳注本」・「中外本」とも「四立」の義として「過ぎ」を考えているようである。

ところで、「晝夜」門所収の、「一更 二更 三更

四更 五更」は、中国的な一夜五区分による命名で、

五夜あるいは五鼓とも称されているものである。一方、

日本語では古く三夜区分(よひ・よなか・あかつき)

が一般的であったから、両者を対応させた時単一和語では中国語に三項対五項となつてうまく対応できないことになる。そこで「よい」に次いで「よいのすれ」、

「よなす(か)」に次いで「よなかすれ」という合成

本書卷四〔晝夜〕門に記載された「搖索(ヨサ)」。『ようさ』の二つの日本語は、以上のような観察からして中央語を記したものと考えられず、情報源よりみて方言(九州方言語彙)をのせたものとみられる。「ヨサ」が〈夜・晩〉の意で、また、助数詞として今も鹿児島で用いられて居り、「ヨウサ」の音変化した《ユーサ》が〈夜・晩〉の意で熊本県や大分県で用いられている事実からしてこの「ヨサ」・「ヨウサ」が当時並行的に用いられていたのではないか。そして十六Cごろ、「ヨサリ」・「ヨウサリ」は中央語として、「ヨサ」・「ヨウサ」は地方語(方言)として用いられていたことを示すものかもしれないのである。第二段・第三段の日本語はいつも語形が一致しているわけではなく、異なる語形をとったり、あるいは欠落したりしていることもある。それでこれ等の日本語は同一人物による同時的記録とは考えられず、右の「ヨサ」・「ヨウサ」も、その情報源が異なり、別々の人によつて記載されたものと考えられる。

(十三)

◎二更 搖一那四立 よいのすれ

◎四更 搖乃隔四立 よな(か)すれ

第二段の音訳漢字「搖」・「一」・「那」・「乃」・「隔」については、すべて「以呂法」に見えて居り、それぞれ「ヨ」・「イ」・「ノ」・「ナ」・「カ」とよむことができるようである。次に、「四」・「立」の二字であるが、「四」字は「以路法」の「す」の欄に、「音事四思糸次寺辞自」とあり、「ス」の音を表したものであることがわかる。「寒温」門の「涼 四字 失今 すすしい」などにも用いられて居り、問題はなしい。問題となるのは「立」字である。

「立」字は「以路法」によれば、

「音里利立烈劔通用」 (「リ」の欄)

「音利里礼力立連列通用」 (「れ」の欄)

とあって、「リ」・「レ」両音を表す文字としてのせ

「夜さ」(夜)のとまりはどこが留りぞ、那波か坂越  
か室が泊りよ」(虎寛本狂言・靱猿)

「夜さ来いといふ字を金紗で縫はせ裾に清十郎と寝  
たところ」(心中重井筒・上)

「ヨサリ」に比べれば事例も相対的に新しく、その  
先後関係は明らかである。

「ヨサ」はまた現代の方言でも各地で用いられてい  
る。それを略記する。

〈夜・晩〉

長野県上伊那郡・愛知県海部郡・三重県・兵庫県・

和歌山県日高郡・愛媛県・鹿児島県

〈今夜・今晚〉

高知県・島根県隠岐島・愛媛県

〈夕暮れ・夕方〉

三重県志摩郡

〈夜を数える時の助数詞〉

福井県遠敷郡「ふつかふたよさ」・長野県西筑摩郡・

愛知県中島郡・奈良県吉野郡・熊本県玉名郡・鹿児

島県

一方、「ヨウサ」は「ヨサ」の変化した語と考えら  
れ、中央語系のことばではないようで、方言世界で用  
いられている。

〈夜・晩〉

千葉県香取郡・奈良県吉野郡十津川など。(ユーサ)

熊本県阿蘇郡・大分県南海部郡

〈今夜・今晚〉

愛媛県南宇和郡・高知県・島根県隠岐島

〈昨夜・昨晚〉

愛媛県

〈夕暮れ・夕方〉

長野県上田・岐阜県郡上郡 (ユーサ) 岐阜県山

郡

〈夜を数える時の助数詞〉

静岡県島田市・広島県比婆郡・山口県阿武郡

「ヨサ」・「ヨウサ」両語の語義はほぼ対応してあ

らわれ、その緊密な関係が知られるのである。

〈今夜・今晚〉

石川県能美郡・長崎県平戸市岐北松浦郡(ヨサル)

富山県礪波 (ユサリ) 宮崎県東諸県郡

〈昨夜・昨晚〉

佐賀県 (ヨサレ) 青森県津軽

〈夕方・夕暮れ〉

(ユサリ) 宮崎県東臼杵郡 (ヨサイ) 佐賀県

(ヨザリ) 島根県出雲

〈過ぐる夜〉

福井県大飯郡

○ヨウサリ

〈夜・晩〉

仙台・群馬県利根郡・静岡県・愛知県・福岡県粕屋

郡香椎・宮崎県西臼杵郡椎葉 (ユースアリ) 新潟

県・山口県・熊本県阿蘇郡下益城郡 (ヨースアリー)

岡山県児島郡 (ヨサーリ) 岐阜県養老郡

〈今夜・今晚〉

(ユースアリ) 宮崎県西臼杵郡

〈昨夜・昨晚〉

(ユースアリ) 新潟県

〈夕方・夕暮れ〉

富山県・兵庫県佐用郡・鳥取市・石川県鹿島郡

(ユースアリ) 熊本県阿蘇郡

「ヨサリ」・「ヨウサリ」の語義は両者対応し、その用法が酷似していることが知られるのである。

以上のような「ヨサリ」・「ヨウサリ」の状況をもとにして、今度は「ヨサ」・「ヨウサ」について考えてみると、この両語も互いに緊密な関係にあることがわかる。「ヨサ」・「ヨウサ」は、「ヨサリ」・「ヨウサリ」の語末音節「リ」の脱落した形と考えられる。そしていずれも語形の成立は新しい。「ヨサ」・「ヨウサ」同士の先後関係は先の「ヨサリ」・「ヨウサリ」と同様に、ヨサ→ヨウサと考えていいと思われる。「ヨサ」は「ヨサリ」の語末音節「リ」の脱落とみられるが、古く中央語系の中でも用いられたようである。

ことになるのである。そこで、この二つの語形について吟味してみよう。

「ヨサ」・「ヨーサ」両者の関係及び語義を考える時、すぐうかんでくるのは「ヨサリ」・「ヨウサリ」の二語である。この二つの語は古典文学作品の中にも登場し、中央語系のことばとして用いられていたことは周知のごとくである。

○ヨサリ

「さらによさり」〈今夜〉このつかさにまうでことのためうてつかはしつ」(竹取物語)

「よさり」〈夜〉このありつる人たまへとあるじにいひければ」(伊勢物語六二)

「大納言よさり」〈昨夜〉きらるべう候なれば」(平家物語、二、少将乞請)

○ヨウサリ

「刺櫛は十まり七つありしかど、たけくの掾の朝に取り、与字佐利」〈夜〉取りしかば……」(催馬楽・

刺櫛)

「ようさり」〈夜分〉ものせむに、いかならむ。恐しさになどあり」(蜻蛉日記、中、天禄二年)

「ヨウサリ」は一般に「ヨサリ」の変化した語とされ(ヨヒサリの転じたものとする説もある)、その先後関係は、ヨサリ→ヨウサリと考えられる。「サリ」は「去る」(近づくの意)という動詞連用形の名詞化したものである。両語は右記のごとく中央語系のことばとして用いられていたのであるが、現在では共通語としてはあらわれず方言の世界で活躍の場が与えられている。

○ヨサリ

〈夜・晩〉

仙台・群馬県多野郡・三重県・和歌山県・長崎県五島対馬・熊本県など 《ヨサレ》山月県庄内・新潟県岩船郡 《ヨサル》富山県氷見・長崎県南高来郡 千々石「よさるのよつほどなごうなつたるけん」・

熊本県 《ヨサイ》長崎県五島・佐賀県・熊本県球

磨郡芦北郡

◎晚 搖索 ようさ

はじめに、第二段の音訳漢字「搖索」のよみについて考える。「搖」字は、「以路法」の「よ」の欄に、「音搖要耀玉欲通用」とあり、「ヨ」の音を表す文字である。本書の「晩夜」門の中でも、

・「一更 搖一 よい」  
 ・「二更 搖一那四立 よいのすれ」

等と用いられ、「ヨ」の音を表すものと考えられる。

次に、「索」字は「以路法」では、「さ」の欄に「音索作昨殺者酌通用」とあって、「サ」の音を表す文字としてのせられている。以上のことから、「搖索」はヨサの音を表すものと考えられる。一方、第三段の、平仮名表記の日本語は、「ようさ」とあり、これは、「よさ」の長音化したもの（ヨーサ）と思われる。そうすると、第二段の音訳漢字「搖索」は「ヨサ」ではなく「ヨーサ」とよむべきではないかという疑問が出てくる。「搖」字の漢字音(jien エウゝ jien 『漢字の語源研究』(藤堂)による)からしてもその可能性はあ

るが、本文(巻四)の内部徴証よりすれば「搖」字を「ヨウ(ヨー)」と長音を表す文字として用いた事例は認められない。すなわち、「搖」字は、巻四では当該事例を含めて二二例用いられているが、これを第一段の見出し語及び第三段の平仮名表記の日本語と対照してみると、すべて短音の「ヨ」を表す文字として用いられている。先に、「晩夜」門の事例をあげたが、他の部門から三例示しておく。

・善人 搖華許多 よか人 (人物)  
 ・嫂 阿尼搖密 あによめ (親屬)  
 ・暦日 果搖密 こよみ (文器)

これ等の「搖」字はすべて短音の「ヨ」で長音「ヨー」ではあり得ない。他の事例もすべて同じである。以上の事実からみて「晩」に照応する「搖索」は、「ヨサ」とよむものと考えられる。

とすれば、嚴密には第二・第三段の日本語の語形が異なることになる。すなわち、「ヨサ」・「ヨーサ」の短音・長音のちがいによる日本語が記載されている



考略』(寄語略)では、「時令類」に、「早 夜 午 晩……」といずれも単字の見出し語としてつづく形をとっている。これによれば、本来単字の見出し語として記載されたものであったと考えられる。しかし、本書の巻四においては編者の私意により熟語としての見出し語とした「可能性はある。その証拠に、「寄語略」の見出し語「午」は本書では「日午」となっているからである。ただ、「訳注本」・「中外本」はともに単字の見出し語「晩」としてかかっている。以上この項については、「一晩」として熟字の見出し語とみる可能性を充分有しているとも思われるが、後出の「二更……」の数字にひかれたための衍字の可能性もすてきれず、筆者としては、「晩」説をとることにする。存疑の部分ではある。

次に第三段の、平仮名表記の日本語について言及する。各項とも語構成上単純語(あした・ようさ・ひる・あさ……)を中心としているが、「あけた」・「ひくれた」は「寒温」の部門で述べた通り、「動詞連用形

+助動詞」の語構成となっている。なお、「よいのすれ」・「よなかすれ」は接尾辞(―すれ)を伴う合成語と認められる。

ところで、「二更 搖二」の第三段、平仮名表記の日本語を、「訳注本」・「中外本」ともに「よひ」と翻訳しているが、本文の異体字は「以路法」にのせる「ひ」の異体字とも異なるし、同部門の「日午」・「暗」に照応する日本語「ひる」・「ひくれた」の「ひ」の異体字とも異なる。どちらかといえは、「い」字の異体字に近似している。そうした観点よりして、「よひ」とした方が正しいと思われる。そうすると、次項の「よいのすれ」とともに仮名違いとなるが、ハ行転呼は当時一般的であるから問題にならないであろう。

## (十二)

次に、「晩夜」門の中で問題となるべきものを二、三とりあげ検討を加える。

〈かじかむ〉

「かじけたりなまりたり二度義理で来る」(柳多留

二二)

「カシク」は中古まで第二音節は清音と認められ、中世後期から清濁両用が併存、近世以後は濁音となったようである。方言の語形としても現存し、清濁両用が用いられているのである。

本書所載の「こしけた」は、以上の検討よりして、当時九州方言語彙の一つとして用いられていたと思われる「コシケル」を採録したものと考えられ、文献所載の方言語彙として注目されるものである。

以上で「寒温」についての検討を終り、次に、「暁夜」の語彙項目について吟味を加える。

(十一)

「暁夜」は、語彙項目一二項。第一段の、標出漢字の見出し語は単字によるもの六項、熟字によるもの六

項である。各項とも第二段・第三段を具有し、その点

において整然とした体裁になっているが、細部において本文に若干の問題点を残す。すなわち、第一項の「早」に照応する音訳漢字の日本語「阿旦」の「旦」字は不審で、「訳注本」が「西」字の誤りではとし、「中外本」も「誤」と注しているのはそのためである。「以呂法」が、「し」の欄に「音失識十式西姐試詩施通用」として「西」字をあげているので、これに従い「阿西旦」の誤りとみておきたい。次に、同じ「早」字に照

応する第三段の、平仮名表記の日本語「あした」の「一」字である。これを、「あした」に下接された「一」字とみて、「あしたい」とよんでも不審で、「一」字を衍字として処理するか、あるいは次項の見出し語「晩」の上接字とみて「一晚」と考えるかである。「暁夜」の後半には、「一更 二更 三更 四更 五更」と漢数字を軸とする見出し語がつづくので、あるいはその連想があったかもしれない。また、「(一) 晩」の次項は「日午」で、これも単字ではない。ただ、『日本国

る地域差（コジケル↪コシケル・コシクル）があるのかも知れない。また、〈凍える、かじける〉の義として用いられる語形も一般に「こじける」で、これは福井県大野郡・京都府・鳥取県西伯郡・岡山県・広島県・愛媛県・福岡県などすべて濁音、熊本県天草でも、「こじくる」と語形は少し異なるが、濁音である点は同じである。しかし、同じ熊本県でも八代郡では《こじくる》と清音が用いられ、「凍える」意に用いられる。

右のように、「コシケ」・「コジケ」の清濁については、地域によって違いがみられるので、本書の「こじけた」が清濁いずれであるか決めたいが、清音のコシケが九州を中心に残っているとすれば、九州方言的色彩のつよい本書の語彙的性格からみて清音の「コシケ」の可能性が大きいとみてよいのではなからうか。なお、「コシケル」の類義語に「カジケル」・「カシケル」・「カジクナル」などがある。その中で、「カシケル」は「コシケル」のルーツとも目され、かつて

下二段活用動詞「カシク」として中央語系の中で用いられていた。

〈姿や顔つきがやせ衰える〉

「衣裳弊れ垢つき形色憔悴（カシケ）」（崇峻即位前

紀、図書寮本訓）「憔悴 オトロフ カシゲタリ」（観智院

本類聚名義抄）「かじけたる女のわらはをえたる

ななり」（源氏物語・東屋）「Caxige, uru, eta

カシケ、クル、ケタ（悴け、くる、けた）、瘦せる、

やつれる……（中略）……Caxiqeta fito（悴けた

人）血色も悪く元気もなくて瘦せやつれた人」（日

葡辞書）

〈草木や花が生気を失ってしおれる。また、生長が不十分で弱々しいさまになる〉

「忽然に皆枯れ悴（カシケ）て」（西大寺本金光明

最勝王経平安初期点）「Panamo vazucani,

codachimo caxige tatcu（花も僅かに、木立も悴

け立つ）Fox.（発心集）巻一、すでに花も小さな花

となり、枝も弱々しく瘦せている」（日葡辞書）

くつか次に示す。

○ケの音を表すと思われるもの

・明 挨吉打 あけた [晝夜]

・炭 下吉四密 やけすみ [火炭]

・樓梯 客吉法西 かけはし [宮室]

・筍 大吉那古 たけのこ [菜蔬]

○キの音を表すと思われるもの

・昨日 吉那 きの [今明]

・北 吉打 きた [方向]

・大斧 要吉 よき [匠器]

・黄瓜 吉鳥里 きう(り) [菜蔬]

右記のごとくケ・キ両音を表すのであるが、第三段の平仮名表記の日本語は「こしけた」であるから、それをもとにケの音を表すものとみるのが一番自然であると思われる。

次に「打」字について。これは「以呂法」の「た」の欄に、「音打他大坦達答帯通用」とみえて居りタの音を表すことは明らかである。

以上の検討によって、「空湿吉打」をコシケタとよむことが確定できそうである。すなわち、第二段・第三段の日本語はいずれもコシケタを表したもので語形において乱れはないといえる。

ところで、「こしけた」は既述のごとく動詞の連用形(「こしけ」)に助動詞(「た」)が下接した形式で、文法的には二品詞より構成された形をとり、他の五項がすべて一品詞(形容詞・動詞)より成り立っている点で語構成上異なる。また、動詞コシケルは中央語系の語ではなく方言の世界で用いられている<sup>II</sup>。それに、「こしけ」にはコシケかコジケかの清濁の問題が加わる。『日国大』・『日方大』によれば、

〔寒さで手などが自由を失う、かじかむ〕の義として「こじける(悴)」があり、滋賀県・丹波、また、京都府竹野郡で「よう冷えるので外仕事は手がこじけた」等と用いられる。ただ、福井県三井郡・福岡県・熊本県では、これを「こしくる」、香川県香川郡・愛媛県では「こしける」と清音である。あるいは、清濁によ

く用いられていた「ホメク」(動詞)の、それも基本義の場合を採録したものとみることができ。

(十)

◎凍 空湿吉打 こしけた

第二段の、音訳漢字による日本語「空湿吉打」については、既述のごとく「天文」に、

・天變 湿氣打 しけた

とあって参考になる。「空」・「湿」の二字について

は、「以路法」(巻三)・「切音正舌歌」(巻四)のい

れにも見えないが、巻四の第二段の音訳漢字の事例からすれば、

。「空」

・聰明人 立空乃許多

・泥金扇 空措尼法古黄旗

・小刀 空客打乃

・金 空措尼

。「湿」

・霜 湿麻

・鹽 湿和

・船重 阿湿一而

・銀硃 湿字木

と用いられて居り、それぞれ「こ」・「し」と、よみを確定することができる。

次に、「吉」字と「打」字について。両字とも「以

路法」や「切音」にみえている文字である。「吉」字

は、「以路法」に、「け」・「き」の両欄に、「音計傑

絮吉結及劫通用」(「け」の欄)・「音氣絮吉乞翕結通

用」(「き」の欄)と記されている。「切音」がこの点

について、「氣吉結計總難分」と指摘するように、そ

の音の確定はむずかしい。そこで、巻四にみえる各部

門の音訳漢字「吉」字を第三段の平仮名表記の日本語

を対象させて調べてみると、ケの音を表すと思われる

ものが九例、キの音を表すと思われるものが二三例、

計三二例の「吉」字があらわれている。その事例をい

〔人物〕

〔内器〕

〔武器〕

〔珍宝〕

〔天文〕

〔調和〕

〔船具〕

〔珍宝〕

広島県比婆郡・愛媛県大三島・長崎県対馬・大分県  
 〈発酵する、すえる〉

広島県比婆郡・大分県、(おめく)大分市  
 等と各地でさまざまの語義で用いられている。

以上は自動詞力行四段活用動詞の「ホメク」である  
 が、この語には、「ホメキ」という居体言や「ホメキー」  
 という形容詞の用法もあるのでこれ等についても言及  
 しておく。

「ホメキ」は、もともと中央語系のものとして用い  
 られていたようである。

「太刀のほめきをさまさんと」(平仮名盛衰記、五)

「ほめきの中に寝入しは」(諸道聴耳世間猿二・三)

現代は方言として、香川県・山口県豊浦郡・鹿児島  
 県肝属郡等で用いられているようである。この語は近  
 代以降中央語系の語から外されているが、明治の後期  
 ごろまでは文学用語としては残っていたようで、その  
 事例を白秋の詩で示すことにする。

明治四三年一〇月「創作」初出の『思ひ出』序詩、

その第二連、

「あるひはほのかな穀物の花か、

落穂ひろひの小唄か、

暖かい酒倉の南で

ひき揉しる鳩の毛の白いほめき？」

一方、形容詞「ホメキー、(ホミキー)」は、もっ  
 ぱら方言の世界で、

「ほめきーき、すいのこにいきよる」

(高知県香美郡)

「今日は大分ほみきー」

(島根県隠岐島)

と用いられる。これは居体言「ホメキ」の語末音節を  
 長音化して形容詞として用いるようになったと考えら  
 れるもので転成の新しい語形である。

なお、「ホメク」・「ホメキ」には、近世頃、「情事  
 をする(こと)」の意として用いられた事例もあるが、  
 これは現代の方言にはうけつがれていないようであ  
 る。

本書『日本考』(卷四所収の「ほめく」は、当時広

ゆる用言的接尾辞「めく」を要素にもつ動詞群に注目したところであるが、いずれも外国人（キリシタン）による日本語観察の中で、「ホメク」が注目されている事実は、この語が当時の口語世界において広く用いられていたことを物語るものであろう。その意味では、この「ホメク」がそれより一〇年程前に刊行された本書『日本考』に既に見えることは、この語の口語的性格を示すものであろう。

さて、「ホメク」の基本義は、「熱くなる、ほてる、赤くなる」こと。先の『日葡辞書』・『日本大文典』の事例はいずれも基本義をもとにしての記述である。この語について語源を「火（ほ）めく」とする『和訓栞』などの説は首肯されるのである。「ホメク」は人の身体についていう場合が多いようで、先の『日葡辞書』の事例がそうであったし、また、次の事例、

「まだ湯上りの顔ほめく汗の額や……」

（曾我五人兄弟、三）

もそうである。

「ホメク」は「ヌクイ」と同様に古く中央語系の語として用いられていたようであるが近代以降共通語の中にとどまることができず方言世界において用いられて来た。地域的には、

石川県江沼郡・福井県坂井郡・大阪市・兵庫県加古郡・奈良県・島根県益田市・山口県・徳島県・佐賀県・長崎市・熊本県玉名郡八代郡・大分県東国東郡・鹿児島県

と、日本の西部を中心にして、それも基本義の「ホメク」が現在も用いられている。「ホメク」は、その他、  
〈蒸し暑くなる〉……気温について

「ひどうほめくもんぞ」（長崎県）をはじめとして、  
京都府何鹿郡・島根県隠岐島・福岡県粕屋郡・熊本県・大分県・鹿児島県

〈発熱して身体が痛む〉

石川県江沼郡・島根県益田市・長崎市

〈蒸れる〉

「積んだ麦がほめく」（群馬県勢多郡）他、岡山市・

## (九)

## ◎熱 貨眉骨 ほめく

第一段の標出漢字「熱」に照応する、第二段・第三段の日本語はいずれも「ホメク」と考えられ、両者の関係に乱れは認められないのである。第二段の「貨眉骨」の音訳漢字の中で、「眉」・「骨」の二字は、既述のごとく「以路法」にみえるものである。「め」の欄に「音眉迷妹滅……通用」、「く」の欄に「音過忽骨或古通用」とあって、「め」及び「く」の音であることを確認することができる。「貨」字は「以路法」には見えないが、既述のごとく、もと喉音次清の曉母に属する文字で、/huo/の音をあらわしたものであり、日本語の「ほ」にあてたものと考えられる。つまり、「貨眉骨」は、ホメクとよむことができるのである。「ほめく」は「寒温」門の中では唯一の動詞形をあげたものといえる(次項の「こしけた」は連語で形容

詞的用法になっている)。この語も「ぬくい」と同様現代では共通語の世界から外されている。しかし、一六〇三年成立の『日葡辞書』には、

「Fomegu, u, eita ホメキ、ク、イタ(燥き、く、いた)非常な暑さである、または、非常に暑い、Miga fomegu. (身が燥く)からだか熱い、または熱がある。」

と動詞形でのせられている。ロドリゲスの『日本大文典』にも、助辞 Megui (めき)、Megu (めく)を添えて一種の動詞が作られるとして、

「Vomegu (うごめく) Vamegu (わめく)  
Fatamegu (はためく) … (中略) … Domegu (どめく) Bitamegu (びためく)」

等の事例をあげているが、その中に、Fomegu (ほめく)があつて、

「Fomegu (ほめく)、非常に熱くなる、又は非常に熱がある」

と説明している。これ等は、日本語動詞の中の、いわ



クソデ(ふところで) ヌクタマリ(日なた) ヌクタロウ(ヌクスケに同じ) ヌクタン(愚か者) ヌクチ(生血) ヌクデ・ヌクドリ(ヌクソデに同じ) ヌクトサ(あたたかさ) ヌクトバツコ(ヌクタマリに同じ) ヌクヌクバナシ(きいたばかりの話) ヌクバイ(あたたかい灰) ヌクマリ(あたたまること) ヌクミ(あたたかい感じ) ヌクムギ(ヒヤムギの対語。あたためたつゆに入れてたべるめん類) ヌクメ(あたためること) ヌクメコソデ(あたためた小袖) ヌクメシ(あたたかい飯) ヌクメズシ(むしずし) ヌクメダイ(干鯛を洗って火にあぶった鯛) ヌクラソデ(ヌクソデに同じ) ヌクワカ(愚かな若者)

## 〔動詞〕

ヌクタマル(あたたまる) ヌクタメル(あたためる) ヌクトマル(ヌクタマルに同じ) ヌクトメル(ヌクタメルに同じ) ヌクトモル(ヌクトマルに同じ) ヌクマル(ヌクタマルに同じ) ヌクム

(あたたまる) ヌクメル(あたためる) ヌクモル(あたたまる)

右記のごとく、動詞自他の対立を軸として(ヌクタマル)ヌクタメルなど)さまざまな語形があらわれるのである。

## 〔形容詞〕

ヌクイ(あたたかい) ヌクタイ(ヌクイに同じ) ヌクダラシカ(むしあつい) ヌクラコイ(ヌクダラシカに同じ) ヌクトイ(ぬくい)

## 〔副詞〕

ヌクヌク(あたたかいさま)

以上、やや煩わしい程の事例を示したが、ヌクを語基とした語群の状況からその造語能力の強さを見ることができよう。本書の「ぬくい」は、これ等ヌク系の語彙の一つとして存在するもので、それがたまたま本書の巻四に記載されたものである。

賀県 (ぬくさい) 鹿児島県喜界島 (ぬくさん)

鹿児島県奄美大島・沖繩県首里

その他がある。こうした日本各地に分布しているヌクイ系の方言語形の存在は、かつて基本義の「ヌクイ」が大きな勢力をもって用いられていた証ともなるであろう。

「ヌクイ」は右の基本義の他にもさまざまな意義用法が看取される。

〈暑い〉……気温の高さをいう場合

「このぬぐい盛りね、よく歩けたもんでば」(青森 県津軽)

をはじめとして、仙台・京都府与謝郡・大分県日田郡・宮崎県東諸県郡など。語形としては、(ぬきい) 広島県賀茂郡・大分県下毛郡 (ぬくか) 長崎県南高来郡千々石 (ぬっか) 熊本県球磨郡など。

〈熱い〉……温度の高さをいう場合

(ぬくとい) 「ぬくといものを食ふ」(愛知県北設楽郡)

右の事例は、食べ物でまだ冷めていない、熱いものを「ぬくとい」といったのである。

〈鈍い、愚かだ、のろま〉……人に対して

「ぬくい人」(京都府竹野郡) 「ぬっか奴」(福岡県久留米市)

「ぬくゑとはあほうのこと」(新撰大阪詞大全)

右の他にも、「裕福だ」の意もある。以上のように、

基本義(気候・温度がおだやかで心地よいこと)を軸としてその意味が分化派生している様子が看取される。なお、「ヌクイ」は、その意義用法がバラエティーに富むばかりではなく、「ヌク」を語基としてさまざまな語形がうまれていることも注目されるのである。『日国大』を参照して次に略記してみよう。

〔名詞〕

ヌク(のろま・ばか) ヌクゴゼン(あたたかい御飯)

ヌクサ(ぬくいこと) ヌクスケ(まぬけな人)

ヌクズシ(ぬくめずし、せいろうずし) ヌ

アタタカイは成立が遅く、本書でもまだあらわれていないことは注目してよいと思われる。ヌクイは現代日本語として中央語系のものとは認められないが、古くは、

「あたたかなるをぬくしといへる…」(名語記、三)

「温ヌクシ」(運歩色葉集)

と「ヌクシ」の語形で辞書類にみえて居り、本書『日本考』に遅れること一〇年の『日葡辞書』にも、

「Nucuiヌクイ(温ヌ)、暖かな(ノク)、または、

暖かである(ノク)、Nucū(温ウ)、Nucusa(温ヤ)」

と「ヌクイ」のイ語尾形で見出し語となっている。

他に、Nucume, uru, eta や Nucumori, u, otta の動詞形の見出し語もみえる。

「ヌクシ(イ)」は古く通用範囲の広い語形であったと認められる。『日葡辞書』が見出し語としてイ語尾形の Nucui(ヌクイ)を載せている点よりして、「ヌクイ」は口語的世界においては「ヌクシ」にかわって当時一般的に広く用いられたものである。既述のご

とく、現代はアタタカ系のうちアタタカイが一般的で共通語的性格をもっているが、ヌクイはむしろ方言としてその活躍の場を担っているようである。

「ヌクイ」の基本義は、「気候・温度がおだやかに心地よいこと、すなわち、あたたかい」ことをいう。

『日本考』が、「温」字に照応する日本語として「ぬくい」をあげているのはそのためである。各地の方言では語形にもさまざまなものがあり、『日国大』・『日方大』<sup>②</sup>を参照して示せば、

《ぬきい》広島県高田郡・大分県 《ぬき》宮崎県

都城・鹿児島県始良郡 《ぬつくい》群馬県利根郡

藤原・静岡県島田 《ぬーとい》千葉県東葛飾郡

《ぬくこい》長野県佐久 《ぬくたい》茨城県・群馬県

馬県・三重県・京都市・和歌山県 《ぬくっとい》

東京都大島 《のくたい》東京都三宅島・福井県

《ぬくとい》筑後柳川・茨城県真壁郡 《のくとい》

埼玉県川越・新潟県・富山県 《ぬくか》佐賀県・

熊本県天草島今津 《ぬっか》福岡市・熊本県・佐

・死 大 (人事類)

・腫 刺大 (人事類)

・活 吉打 (人事類)

・瘦 牙十大ア (通用類)

両者を比較することによって、本書の日本語の語形を推定することができるものもある(「來」の吉人↓吉大、「暁得」の失火↓失大マなど)

さて、「寒温」部門の六項は語義的観点よりすれば、自然界の温度差を軸として対義語同士の関係にあるものに分類することができよう。

さむい — あつい

すすしい — ぬくい

こしけた — ほめく

〔寒温〕部門所収の語彙項目で特に問題とすべきものは、「ぬくい」・「ほめく」・「こしけた」の三項である。以下、順次検討を加える。

(八)

◎温 奴貴 ぬくい

第二段の音訳漢字二字のうち、「奴」字は既述の通り「以路法」に載せられて居り、「ぬん」の欄に、「奴」怒度穠捺戸通用」とあってそのよみを知ることができる。「貴」字については、同「以路法」には見えないが、その漢字音は、*knued* — *knuei* — *knui* — *gui* と変化したもの(学研漢和大辞典による)で、「くい」の類音表記として「貴」字が用いられたものであろう。すなわち、第三段の平仮名表記の日本語は第二段の音訳漢字による日本語と語形的には一致することになる。

「温」字に対応する日本語として、アタタカ系の語彙(アタタケシ・アタタカナリ・アタタカゲ・アタタカイなど)が予想されるが、本書では、そうではなく「ぬくい」が対応している。アタタカ系語彙のうち、

助動詞「た」は「寒温」の部門では「こしけた」の一例をみるのみであるが、巻四全体をみればいくつかの事例をみることができ、それを次にあげる。

・天變	湿氣打	しけた	〔天文〕
・明	挨吉打	あけた	〔晝夜〕
・暗	血古里打	ひくれた	〔晝夜〕
・熟	捷吉打	てきる	〔炊煮〕
・煮不熟	和六尼也打	おろにえた	〔炊煮〕
・拳	迎其打	にきた	〔身体〕
・來	何耶俚吉人 <sup>(大)</sup>	<sup>(まじり)</sup> きた	〔人事類〕
・曉得	个个俚打失火 <sup>(大)</sup>	<sup>(たじろえ)</sup> きた	〔人事類〕
・醉	邀滞(ようた)		〔人事類〕
・死	身大(しんだ)		〔人事類〕
・腫	刺大(はらた)		〔人事類〕
・活	吉打(いきた)		〔人事類〕
・瘦	牙十大(やした)		〔人事類〕

以上一三項である。中で、「熟」に照応する日本語のうち、第三段の「てきる」は助動詞「た」が下接し

ていない(第二段は「捷吉打」と助動詞が下接している)し、「來」以下の「人事類」所収の七項は、第三段の平仮名表記の日本語がすべて欠けている。また、「腫」・「活」の各見出し語に照応する音訳漢字「刺大」・「吉打」は語義的にみて音訳漢字の第一字(ハ・イ)の音を写す漢字)が欠落したものと考えられる。このように本文中に存疑の箇所が散見されるが、助動詞「た」の事例を示すものと考えられる。

ところで、「人事類」は「鳥獸類」とともに第三段の平仮名表記の日本語が欠けているのが本書(『日本考』巻四)の特徴であるが、この部分は『日本国考略』(寄語略)の流れを汲むもので、一々平仮名表記の日本語を加えることをしなかつたものであろう。先にあげた「人事類」所収の七項はすべて「寄語略」の「人事類」・「通用類」にもあるから、それを次に示す。

・來	何耶俚吉大	〔人事類〕
・曉得	个个俚打失大	〔人事類〕
・醉	等帶	〔人事類〕

し語の他に二字または三字の見出し語をもちかけているのとは異なる。第二段の、音訳漢字による日本語では、「奴貴」(温)、「貨眉骨」(熱)等の「奴」・「眉」・

「骨」が「以路法四十八字様音註清濁変用」(卷三)にのせられていて、そのよみの基準を与えてくれる。なお、「貨」字は右の「以路法」には見えないが、もと喉音次清の曉母に属する文字で /huo/、当時のハ行子音の音声状況を知る上で注目される用字の一つであった。また、「空濕吉打」(凍)は既出の「濕氣打」(天變)「天文」と類似した表記で訓みの参考になるであろう。

第三段の、平仮名表記の日本語は六項とも欠けるところがなく、第二段の音訳漢字による日本語と語形がそれぞれ一致していて整然とした体裁となっている。

第二・第三段の日本語は、語彙項目六項のうち四項は形容詞を収めるが、それ等はすべてイ語尾をとるもので、カ語尾のものは認められない。「天文」門では、

- ・ 風歪 外里革熱 わるい風
- ・ 風好 搖格革熱 よか風

・ 天開 天氣搖格 てんきよかと、カ語尾・イ語尾が共存しているのとは対照的である。次に、

・ 凍 空濕吉打 こしけた  
 の「こしけた」は、動詞(こしける)の連用形に助動詞「た」の接続した事例である。助動詞「た」は完了の助動詞「たり」の語尾が落ちて成立したもので、早くは院政期に、

とききぬと古郷さしてかへる雁こぞきた道へまたむかふなり(為忠集「帰雁」)

と事例がみられ、鎌倉時代以後事例も増えてその用法も多様化してくる。

女房ヲ只今夜打入テ殺シ奉リタト申ス(延慶本平家物語、二末)

本国デハワルカツタガ別ノ処ヘイツテヨカツタ事(史記抄十二)

後者の事例は形容詞のかり活用に下接した場合で新しい用法である。

## 『日本考』の研究

## — 語彙の性格 — (二)

福田 益和

各項とも、

漢字標出の見出し語——音訳漢字による日本語——  
平仮名表記の日本語の三段構成である。語彙項目が少ないので、その全体  
を次に記す。

## (七)

『日本考』巻四、五六部門・語彙項目一一四六のうち、天文四〇項、時令一七項については既に検討した。

中には不審の語形をもつものもあるが、それは九州方言的性格のものともみることによって氷解するものもある。そうした観点に立って、「寒温」・「晝夜」・「月分」等以下の諸部門に収められている語彙項目についても、同様に方言的世界に視野を広げることによって解決されるものも多いと期待される。

次に、「寒温」門について検討する。

語彙項目六項。「天文」・「時令」の体裁に同じく

・冷<sup>(1)</sup> 三昧 さむい ・温 奴貴 ぬくい  
 ・涼 四字失令 すずしい ・暖 阿醉 あつひ  
 ・熱 貨眉骨 ほめく ・凍 空湿吉打 こしけた

『日本考略』(寄語略<sup>2)</sup>)には、寒温門がないが、これ等の一部は、同書の「時令類」の中に、

・冷 三季水 ・煖 挨拶水

として収められている「冷」・「煖」を見出し語とする各語彙項目に通じるものであるう。

右に記した通り、「寒温」はすべて単字を見出し語としている。つまり、第一段に標出された漢字の見出し語は一字のみ。「天文」・「時令」が、一字の見出